

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

On the “Nalukataq” Whaling Festival in Barrow, Alaska, USA with a Focus on the Communal Feast and Sharing of Whale Meat during the Festival

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00003848 |

cessful whaling captains (and their wives) and their crews. The author, focusing on the communal feast and whale meat distribution during the festival, examines it by actor network theory and functional analysis.

The analysis shows that although the Nalukataq festival is organized and carried out intentionally by one or more whaling crews, it is in fact accomplished through the interaction of several human and non-human “actors” including whaling groups, villagers, God, whales, elements of the natural environment, the whaling activity itself, etc. Furthermore, the author argues that while the communal feast and whale meat distribution contribute to the cultural well-being of all the Inupiat villagers because these practices provide them with highly valued food, the practices also provide an occasion during which the villagers evaluate the host groups socially and give them social prestige.

| | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1 はじめに | 4.2 ナルカタックの準備 |
| 2 データ収集および記述と分析のための枠組みについて | 4.3 ナルカタックの実施（2012年6月29日開催の事例） |
| 3 バロー村におけるイヌピアットの捕鯨と分配、祝宴について | 4.4 ナルカタック祭の祝宴において提供された鯨肉などの重量について |
| 3.1 バロー村の捕鯨について | 5 検討 |
| 3.2 バロー村の捕鯨祭および祝宴について | 5.1 アクターネットワーク論によるナルカタックの検討 |
| 4 バロー村における捕鯨祭「ナルカタック」の祝宴と鯨肉の分配について | 5.2 ナルカタックの機能分析 |
| 4.1 2012年の春季捕鯨とナルカタックについて | 6 結語 |

1 はじめに

アラスカ西部沿岸から北西沿岸にかけてユピート (Yupit) やイヌピアット (Inupiat) が居住している。彼らのうち、カクトヴィク、ヌイックスト、バロー、ウェインライト、ポイント・レイ、ポイント・ホープ、キヴァリナ、リトル・ダイオミード、ウェールズ、サヴォーンガ、ガンベルの11カ村に住む人々は「捕鯨の民」

として知られている（地図1）。

この地域では、およそ2,000年前から寄りクジラなどを利用していたことや紀元後10世紀ごろから意図的にホッキョククジラやコククジラを捕獲し始めたことが知られている（Savelle 2005）。このようにこの地域における捕鯨の歴史は1,000年以上にも及び、捕鯨は長い間、彼らの生活の糧を入手する手段であった。彼らの文化（生活様式）は捕鯨活動を核として形成されてきたといっても過言ではない（Chance 1990; Sheehan 1997）。ただし、その文化はこの100年あまりの間に、頻繁になった欧米社会との政治経済的な接触や市場経済のグローバル化の諸影響によって急速に変貌を遂げてきた。

1848年から1914年にかけてアメリカの捕鯨船がベーリング海峡からカナダ西部極北地域にかけての沖合で操業を行ない、16,594頭のホッキョククジラを捕獲した（Bockstoe et al. 2005: 4, 6）。この捕鯨はクジラ資源を枯渇させ、地元の先住民による捕鯨に悪影響を及ぼした。このため先住民は毛皮交易やその他の狩猟漁労活動に従事することで食料不足を補うようになった。また、この地域では1890年ごろからキリスト教の布教が行われ、1910年ごろまでにはほぼすべてのイヌピアットがキリスト教に改宗した（Burch 1994）。1947年には米国海軍が現在のバロー村の近くに北極調



地図1 アラスカ捕鯨村の地図（岸上 2012b: 150）

査施設を開設し、1980年まで存在した。この施設では、労働者として多くのイヌピアットを雇用した。

1968年にはバロー村の東方、カナダとの国境に近いプルドー湾地域で油田が発見され、アラスカ州政府がその借地権を石油会社に売却したため、アラスカ先住民はアラスカ州政府と米国政府に反発した。油田開発を進める前にこの問題を解決する必要があったため、アラスカ先住民と米国政府の間で土地権の交渉が行われ、1971年にはアラスカ先住民土地請求処理法（Alaska Native Claims Settlement Act, 略称 ANCSA）が成立した。この結果、アラスカ先住民は地域ごとに12の地域会社へと組織され、全体で約17万8,000平方キロメートルの土地と6億6,250万ドルの補償金を手に入れた。その後、アラスカ北部に住むイヌピアットはノース・スロープ郡（North Slope Borough）を創設し、多数派の住人として政治経済的な自律性を保ってきた。

イヌピアットやユピートらアラスカ先住民によるホッキョククジラの捕獲は、1977年に国際捕鯨委員会（略称 IWC）の決定によって一時的に中断を余儀なくされたが、1978年より捕獲制限を伴う明確な条件のもとで先住民（原住民）生存捕鯨として実施されるようになった（浜口2012: 49）。1998年以降、その捕獲枠は5年ごとに決定されるようになり、2008年から2012年の間は、アラスカ先住民は総頭数で280頭までのホッキョククジラの捕獲が許可されている¹⁾。

筆者は、2006年9月よりアラスカ州バロー村において捕鯨と鯨肉の分配に関する現地調査を実施してきた。現在のイヌピアットは、市場経済の変動や地球温暖化、油田や北西航路の開発、国家やIWCの決定、環境・動物保護運動などの影響のもとで捕鯨に従事している（岸上2009, 2102a; Kishigami 2010）。

本稿の目的は、アラスカ州バロー村のイヌピアットによる現代の捕鯨祭「ナルカタック」(*nalukataq*)について、祝宴における共食と鯨肉の分配に焦点を合わせながら報告することである。さらに、アクターネットワーク論と機能分析を援用し、ナルカタックについて検討する。アクターネットワーク論を援用する理由は、イヌピアットが祭りを能動的に実施している一方、自然環境やクジラといった人間ではないアクター（要因）が祭りの開催の有無やその規模に決定的な影響を及ぼしていることを明示できるからである。また、機能分析を併用するのは、イヌピアットにとってのナルカタックの意義や意味を検討するためである。なお、本研究の意義は、ほとんど研究がされていない現代のナルカタックについて報告し、上記の視点から検討を加える点にある²⁾。

2 データ収集および記述と分析のための枠組みについて

第2節では、本報告のデータの収集と分析の枠組みについて述べておきたい。

筆者は、イヌピアットの現代の捕鯨文化を研究するために、2006年9月よりアラスカ州バロー村において計12回の現地調査を行ってきた³⁾。このうち、第5次調査(2009.6.7～6.19)と第10次調査(2011.6.15～6.28)および第12次調査(2011.6.25～7.4)において捕鯨祭ナルカタックとアプガウティ(*apugauti*)に関して聞き取り調査と参与観察を行なった。本稿では、「ナルカタック」の事例として第12次調査の参与観察に基づくデータをおもに利用する。

本稿では、現代のグローバル化した政治経済的脈絡と環境条件の中で実施されているナルカタックを記述的に報告した上で、ナルカタックがいかなるアクター(actor)と相互に関係をもちつつ、各アクターがいかなるエイジェンシー(agency)を発揮しながら、ナルカタックが実施されているかを記述し、分析したいと考える。そのため、使用するアクターやエイジェンシーなどの概念を簡単に整理しておきたい。アクターネットワーク論を主唱したブルーノ・ラトゥール(Bruno Latour)は、アクターとアクタント(actant)を区別することがあるが、アクターとは人間や非人間を含むあらゆる存在者を指し、差異を生み出すことによって他の存在者の状態に影響を与えることができるものである(Latour 2005: 71)。それらのアクターが形成する諸関係がネットワークである。ネットワークはその作用を通じてアクターを変化させ、アクターは互いに影響を及ぼしながら多様なネットワークを形成していく。これらのネットワークが「アクターネットワーク」とよばれるものである(久保 2011: 37)。

アクターに類似する用語に「主体」(サブジェクト, subject)やエイジェント(agent)がある。田中によると、フランスの主体論における主体には2つの意味が付与されているという。一方は、自由で責任のある存在であり、もう一方は超越的な権威の呼びかけに服従・従属する存在である(田中 2006: 13)。田中はバトラーの『ジェンダー・トラブル』(1999)を批判的に検討することによって、フランス流の主体論に欠如していた呼びかける権威に対して非従属的な側面が存在することを強調する。すなわち、呼びかけを通じて生み出されるのは不安定でありながらも同時に語りかける力をもつエイジェント(行為媒介者)である。ここに出てくる主体やエイジェントとは権威によって従属させられつつも、その権威に完全には従わないという2つの側面を持つ存在である。この点は、A. ジェル(Gell)が、ある存在者は、その行為を受け取る

受動的な存在との関係を介して行為主体（エイジェント）となると指摘している（Gell 1998: 22）。すなわち、関係のあり方いかんでは同じ存在者は受動的でもあるし、能動的でもあるということが出来る。これらの考え方に共通しているのは、存在者は従属的でありえるとともに能動的でもありえる存在であり、それらは存在者間で形成される関係によって大きな影響を受けるし、その関係そのものにも影響を及ぼすという点である。

本稿では、人間のみならず、現象や物質など非人間をも含めた存在者をアクターと呼び、それらの関係をネットワークと呼ぶ。アクターやネットワークが他のアクターやネットワークに何らかの作用を及ぼすことをエイジェンシーと呼ぶことにしたい⁴⁾。

アクターネットワーク論は、複数のアクターが相互に関係し合い、特定の集合的実践を出現させたり、させなかったりすることをアクター間のネットワークに注目しながら描き出すことができるが、ナルカタックを実施する人やそれに参加する人にとってその実施がどのような社会的効果や意味があるかについては十分に把握することができない。そこで本稿ではナルカタックを現地の社会的脈絡の中で機能分析を行う。また、通常、アクターネットワーク論では、現象や活動に係わるアクターを同等な要素として取り扱うことを特徴とするが（春日 2011: 14; 久保 2011）、ここではナルカタックそれ自体を中心的なアクターとして、記述と分析の中心に据えることをお断りしておく。

本稿では、ナルカタックに関する情報を提示した上で、アクターネットワーク論を援用してナルカタックを他のアクターとの相互作用としてイヌピアットの視点から記述し、検討する。その上で、ナルカタックについてどのような社会的効果や社会的意味があるかという視点から機能分析を試みる。

3 バロー村におけるイヌピアットの捕鯨と分配、祝宴について

分析に先立ち、ここではバロー村における捕鯨活動と、それに関連する祝祭と祝宴に関する全体像を紹介し、捕鯨祭「ナルカタック」の背景となる情報を提示する。

3.1 バロー村の捕鯨について

アラスカ北西沿岸地域に住むイヌピアットらが捕獲するのはホッキョククジラ（英名 Bowhead Whale, 学術名 *Balaena mysticetus*）である。ホッキョククジラの成獣は体長が約 15～18.5メートル、体重が約 60～80 トンになるヒゲクジラ的一种である

(笠松 2000: 15)。以下では、クジラと略称するが、そのクジラは、冬季をベーリング海域で過ごし、夏季をカナダ西部極北地域の沖合で過ごすため、季節的に移動する。このため調査地のバロー村の沖合を4月下旬から5月下旬にかけてと、9月下旬から10月下旬にかけて通過する。この2つの時期がバロー村におけるクジラの猟期である。

バロー村には約55の捕鯨集団 (whaling crew) が存在している。各集団は、キャプテン夫妻を核とし、約5名から約15名の乗組員 (ハンター) と、おもに妻など彼らの家族の一部から構成されている。この集団が、捕鯨とその後の祝宴の準備および実施の母体となる。なお、各狩猟期に出猟するのは35集団前後である。

春季捕鯨の準備は2月から始まり、ウミアック (大型皮船) の補修や船体カバーの新調、狩猟道具やキャンプ用資材の整備、天然地下冷凍庫の掃除、村からキャンプ地までをつなぐトレイル作りなどを行なう。4月下旬になると、各集団が氷原の海縁部に行き、約30～50メートルごとにテントを設置し、クジラの出現を見張る。接近可能な距離にある海上にクジラを発見すると、3名から6名がウミアックに乗り込み、静かに接近する。最初に銛を打ち込み、その後ショルダーガンでとどめをさす。仕留めたクジラを船外機付きボートで解体場所の近くまで運んだ後、海水上に引き上げ、解体を行う。解体場所で第1次分配が行われた後、鯨肉やその他の可食部位を村に運ぶ。この春季捕鯨は、4月下旬から5月中旬にかけて行なわれ、この期間中、各捕鯨集団は海氷上のキャンプに留まり、捕鯨活動に従事する⁵⁾。

秋季捕鯨は、9月下旬から10月中旬ごろまでバローから10～30キロメートル離れた沖合で行なわれる。この時期は日照時間が短いことや狩猟場が離れていることから、船外機付きの大型ボートを利用して捕鯨を行う。基本的な操業は、早朝に村を出、夜には村に帰ってくるという日帰り猟である。海上でクジラを発見すると近づき、銛を打ってから、ショルダーガンでとどめをさす。仕留めたクジラは、3～8隻の船外機付き大型ボートでバロー村近郊の解体場まで曳航する。浜辺から解体場所までは、ブルドーザーを利用して運んだ後、解体を行う。解体場所で第1次分配が行われた後、鯨肉やその他の可食部位を村に運ぶ。

すでに指摘したように、現在の捕鯨は国際捕鯨委員会の管理のもと捕獲頭数制限が課せられている。イヌピアットの人口が多いバロー村では1年22頭までの捕獲が許可されている。ただし、他村でクジラがとれなかった場合には、他村の捕獲枠がバロー村に移譲されるため、22頭以上捕獲する年もある。2005年から2012年秋季までのバロー村における水揚げ頭数は、表1に示すとおりである。2005年から2012年までの水揚げ頭数は、1年平均21.9頭であった。なお、バローの捕鯨者は、体長8～

10メートルの比較的小型のクジラを好んで捕獲する傾向にある⁶⁾(岸上 2012b: 166)。

表1 2005年から2012年春季までのバロー村におけるクジラの水揚げ頭数(各年の春季捕鯨の捕獲数, 秋季捕鯨の捕獲数, 捕獲総数)

| 年 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 春季 | 16 | 3 | 13 | 9 | 4 | 14 | 7 | 14 |
| 秋季 | 13 | 19 | 7 | 12 | 15 | 8 | 11 | 10 |
| 合計 | 29 | 22 | 20 | 21 | 19 | 22 | 18 | 24 |

出典：岸上(2012b: 151) および2011年11月と2012年6月のフィールド調査の結果

3.2 バロー村の捕鯨祭および祝宴について

ここでは捕鯨後に村全体を巻き込み開催される祝宴の全体像を示しておきたい。バロー村において捕鯨や捕鯨祭と関連して実施される祝宴には、おもに(1)捕獲後のキャプテン宅での祝宴(*nigipkai*), (2)アプガウティ(*apugauti*)の祝宴, (3)ナルカタック(*nalukataq*)の祝宴, (4)感謝祭(Thanksgiving Day)の祝宴, (5)クリスマス(Christmas)の祝宴がある。これ以外に現在では2年に1度, 村外の人々を招待して開催される使者祭(キヴィアック, *kivgiq*)の祝宴がある。

春季捕鯨であれ, 秋季捕鯨であれ, 捕獲したクジラを解体し, 第1次分配が終わった直後に, 捕鯨に成功したキャプテンの自宅で祝宴が開催され, 村人に捕獲したクジラの肉や内臓が提供される。この時には, タヴシ(*tavsi*)と呼ばれるバルト状の部位の肉と脂皮(脂肪付きの皮部, 現地名*maktak*)の半分, および舌と心臓, 腎臓, 小腸の部位の半分の煮た料理が振る舞われる。村の古老はキャプテン宅の居間や食堂で食事を楽しむ一方, 村人は各自の家族全員分の肉や脂皮, 内臓をもらいにキャプテン宅に三々五々にやってくる。配布する料理がなくなった時点でこの祝宴はお開きになる。

春季捕鯨に成功した捕鯨集団は5月中旬から6月初旬にウミアックを陸揚げする時にアプガウティの祝宴を実施する。この祝宴はもともと各集団のハンターを家族が出迎え, 食事を提供することであったようだが, 1980年代から村人全員を浜辺に招待して, ミキガックと呼ばれる(鯨肉と脂皮, 脂肪, 血液を混ぜ合わせ, 発酵させた)料理, カモやガンのスープ, パンや果物, コーヒー, 紅茶が提供されるようになった。各捕鯨集団が独自に開催するため, 捕鯨に成功した集団の数だけ実施されることが多い(岸上 2011)。

6月下旬には春季捕鯨に成功した捕鯨集団が単独で, もしくは複数が合同で捕鯨祭ナルカタック(ブランケット・トス祭)の祝宴を実施する⁷⁾。通常, バロー村では毎年2~4回のナルカタックが実施される。この祭りは, 祝宴やブランケット・トス遊

岸上 米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて

び、ドラム・ダンスからなる大規模な催しであり、正午から夜中にかけて半日以上を費やして実施される。この祭りでは、ガンやカリブーのスープ、ミキガック、冷凍肉、エスキモー・ドーナッツ、果物、コーヒー、紅茶などが振る舞われる。このナルカタックが秋季捕鯨後に行なわれない理由として、10月中旬には日照時間が1日数時間と短くなり、気温も下がるため、野外でのナルカタックの実施が困難なこと、そしてバロー村の捕鯨の中心は伝統的に春季捕鯨であることが考えられる。

11月のキリスト教の感謝祭と12月のクリスマスの時には、村人はバロー村にある複数の教会のいずれかのミサに出席し、その後で共食会が実施される。また、冷凍肉や冷凍脂皮の切り分けられた塊が出席した家族に分配される。興味深い点は、捕鯨キャプテンはほぼ同じ量の冷凍肉や冷凍脂皮を4つの教会に寄付するが、教会よって出席者の数が異なるので、一家族当たりがもらうことのできる量が異なることである。出席者の少ない教会では、一家族当たり20キログラム以上の冷凍肉や冷凍脂皮を入手できる。

ノース・スロープ郡の政治的中心地であるバロー村では、2年に1度、2月ごろに使者祭が開催され、近隣の村々から多数のイヌピアットが集まる。この時には、村人や郡政府がホストとなり祝宴を開催し、それぞれの村やダンス・グループがドラム・ダンスを披露する。

以上が、バロー村で実施されている村全体に関係する祝宴の概要である。

4 バロー村における捕鯨祭「ナルカタック」の祝宴と鯨肉の分配について

ナルカタックとは、すでに指摘したように、春季捕鯨に成功した捕鯨キャプテンとその集団が主催する捕鯨祭である。「ナルカタック」は、「ブランケット・トス（遊び）」を意味する。ブランケット・トス遊びとは、捕鯨に成功したウミアックの乗組員や彼らの関係者が、ウミアックのアザラシ皮製の船体カバーを縫い合わせて作ったシートの端を持ち、上下に大きく振り、そのシート上で1人ずつ高く飛び上がるトランポリンのような遊びである。本節では、ナルカタックの祝宴とその際に実施される鯨肉などの分配について2012年6月29日開催の事例を紹介する。

4.1 2012年の春季捕鯨とナルカタックについて

2012年の春季捕鯨は、バロー村全体で14頭のクジラが水揚げされ、大猟であった。

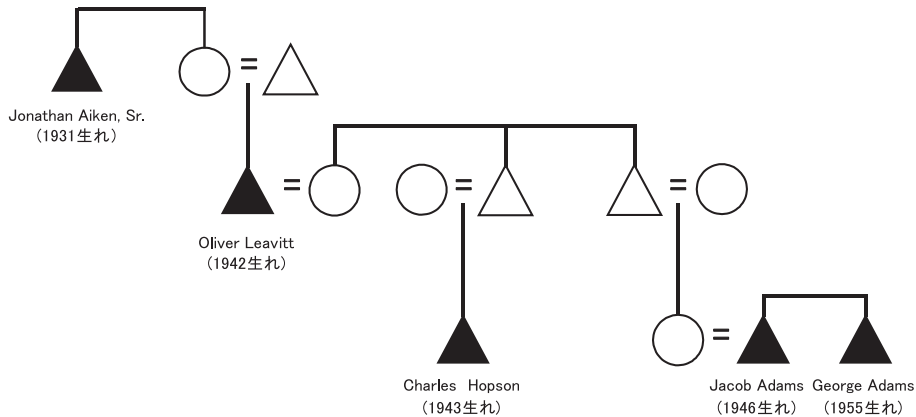


図1 2012年6月29日にバロー村でナルカタックを合同開催した捕鯨キャプテンの関係（聞き取りより再構成）

2頭を捕獲した捕鯨集団がいたので、13集団がナルカタックを開催することになった。各集団の捕鯨キャプテンが日程を調整した結果、2012年6月13日（1集団のみ）と6月21日（2集団合同で）、6月23日（1集団のみで）、6月25日（4集団合同で）、6月29日（5集団合同で）に開催することになった。

6月29日にナルカタックを合同開催した捕鯨キャプテンは、ジョナサン・エイキン Sr (Jonathan Aiken, Sr.)、ジェイコブ・アダムス Sr (Jacob Adams Sr.)、ジョージ・アダムス (George Adams)、オリバー・レビット (Oliver Leavitt)、チャールズ・E・ホプソン (Charles E. Hopson) であった。彼らは、捕鯨を開始する前のトレイル作りも合同で行なった。これらを合同で行う背景として、図1で示す通り、捕鯨キャプテン同士が血縁や婚姻で結ばれている広義の拡大家族関係にあり、日頃から親しい付き合いをしてきた間柄であることがあげられる。

4.2 ナルカタックの準備

ナルカタックの準備は、クジラの捕獲後にスープに入れるガンやカモの狩猟を行なうことから始まる。各捕鯨集団のメンバーは捕鯨キャプテン夫妻の指示に従って準備を行う。おもな準備を時系列に示すと次のようになる。

クジラの捕獲に成功すると、まず、設置していた捕鯨キャンプをたたみ、村に帰り、キャプテン宅で祝宴を開催する。その後、捕鯨キャプテンと彼の乗組員の一部は内陸部に行き、ガン猟やカモ猟を行なう。捕鯨集団ごとに50羽程度捕獲し、天然冷凍庫に保存しておく。一部分はアプガウティの時に料理される。

ナルカタックの2週間ぐらい前になると、肉や内臓、脂皮を天然冷凍庫から取り出し、適切な大きさに切る作業を開始する（写真1）。オーティ（*Uati*）の部分の肉と脂皮の半分、イティグルク（*Itigruk*）の脂皮、アッキッカーク（*Aqikkaak*）の脂皮の半分、心臓や小腸、腎臓の半分、舌の4分の1をナルカタック用に使用する。加工した鯨肉等は、ナルカタックの当日か前日まで天然冷凍庫で保管する。また、2週間前から10日前には、鯨肉と脂皮、脂肪、血液を混ぜ合わせ発酵させるミキガック作りを開始する（写真2）。さらに捕鯨集団のメンバーは、ブランケット・トス用のブランケットを捕鯨に使用したウミアックの船体カバーを縫い合わせて作る。

ナルカタックの1、2日前になると肉や内臓を煮たり、パンを焼いたり、デザートの手準備をする。この時までには、果物や飲み物、紙皿、紙コップなどを準備する。

ナルカタックの開催日の前日になると、複数の捕鯨集団が集まり、会場の設営を行なう（写真3）。長方形の区画に木材とビニールシートを利用して風よけを立てるとともに、主催者の捕鯨集団の旗を立てる。また、ブランケット・トスのための準備を入念に行なう（写真4）。

当日の午前中から主催者は捕鯨集団ごとにテントを立て、お湯を沸かし、コーヒーや紅茶の準備を始める（写真5）。また、トラックで料理や肉を会場に搬入する。

4.3 ナルカタックの実施（2012年6月29日開催の事例）

会場内の来客席は4つのゾーンに分けられ、さらに第1ゾーンは1～5に、第2ゾーンは6～10に、第3ゾーンは11～15に、第4ゾーンは16～20に分けられ、番号を風よけ用のビニールシート製の壁に貼り付けてある（図2）（写真6）。5つの捕鯨集団それぞれが、4つのゾーンの特定の番号のエリアを担当し、食物を配る。全体のコーディネーターがどの捕鯨集団がどのゾーンを担当するかを指示する。各捕鯨集団は食物を来客に3回配布するが、毎回、コーディネーターの指示に従って担当ゾーンが替わるようになっている。来客は家族単位でその日1日を過ごす場所取りを行なうが、特定の家族が特定のゾーンに場所を取るわけではない。また、ナルカタックは村人全体を対象にした祭りであるため、分配される食物の量は個人間では差異が生じない。なお、筆者が調べた限りでは、会場内で神やクジラに食物を供えることもなく、そのような場所もなかった。

正午から第1回目の食物の提供が行われる。正午すぎると、5つの捕鯨集団のメンバー全員とその家族が手をつないで円形に並び、キリスト教の神にクジラが獲れ、ナルカタックを開催することができたことについて、感謝の祈りをささげる（写真7）。

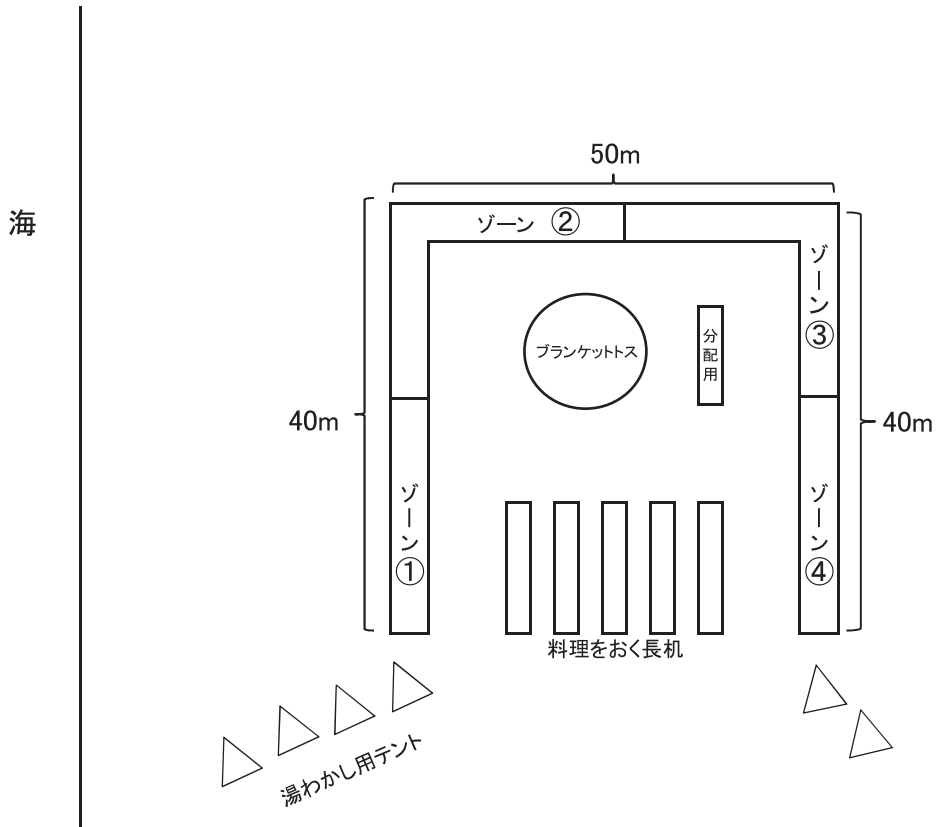


図2 ナルカタックの開催会場見取り図

その後、村人に料理を振る舞う。

各捕鯨集団から男女2人1組からなる数組の給仕（配布）係が、会場の担当箇所に座っている来客1人ずつに料理をよそっていく。来客である村人は家族ごとにクーラーボックスに皿やコップ、ナイフ、ファスナー付きプラスチック袋、ビニール袋などを持参して来場している。また、大半の客は座るための簡易椅子を持ち込んでいる。

まず、給仕（配布）係は、大きな鍋に入ったカリブーとライスのスープもしくはガンとライスのスープを鍋から無くなるまで配り歩く（写真8）。来客はスープ皿やプラスチック製容器によそってもらい、その場で食べる。次に給仕（配布）係は、紙箱やプラスチック製バケツに入れた煮たクジラの肉や小腸を角切りにしたものを無くなるまで配布し続ける。来客はその場で食べるが、食べきれない残った肉や内臓はファスナー付きプラスチック袋に入れて持ち帰る。この後、デザートとしてエスキモー・ドーナッツ（揚げパン）やパイロット・ビスケット（乾パン）、コーヒーと紅茶を来

岸上 米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて



写真1 ナルカタックのための鯨肉の切り分け作業 (2011年6月中旬バロー村で撮影)



写真2 ミキガック(発酵肉)作り (2009年6月中旬バロー村で撮影)



写真3 会場の設営 (2012年6月28日バロー村で撮影)



写真4 ブランケット・トスの準備 (2012年6月28日バロー村で撮影)



写真5 ナルカタック会場での飲み物の準備のためのテント (2012年6月29日バロー村で撮影)



写真6 ナルカタック会場の様子 (2012年6月29日バロー村で撮影)



写真7 ナルカタック開始の祈り (2012年6月29日パロー村で撮影)



写真8 スープを振る舞う捕鯨グループのメンバー (2012年6月29日パロー村で撮影)



写真9 子供たちのブランケット・トス遊び (2012年6月29日パロー村で撮影)



写真10 紙皿に盛られたミキガック (2012年6月29日パロー村で撮影)



写真11 会場内に置かれた分配用の尾びれと胸びれ (2012年6月29日パロー村で撮影)



写真12 冷凍脂皮(マツタック)の配布 (2012年6月29日パロー村で撮影)



写真13 ブランケット・トス遊び (2012年6月29日バロー村で撮影)



写真14 ドラム・ダンス (2012年6月29日バロー村で撮影)

客に振る舞う。来客は一緒に来た人々や捕鯨集団の給仕（配布）係と談笑しながら、食事を楽しむ。この食事中に会場の外からキャンディが主催者のメンバーによって投げ込まれる。

午後1時10分ごろに第1回目の祝宴は終了し、次の食物の提供は午後3時とのアナウンスが行われる。

午後1時10分ごろから午後3時前まで大半の来客は来客席に留まり、談笑をする。一方、会場の中央では、子供たちを対象としたブランケット・トス遊びが行われる。世話人の指導のもと、子供たちは順番にブランケットの上に上がり、高く飛ぶことに挑戦をする（写真9）。

午後3時になると第2回目の祝宴が始まる。最初に古老がキリスト教の神への感謝のこぼを5分ぐらい発する。その後、各捕鯨集団は給仕（配布）する場所を替えて、ミキガックと呼ばれる発酵肉料理を無くなるまで振る舞う（写真10）。来客は、食事とともに雑談をしながらゆっくりと時間を過ごす。小さな子どもたちはブランケット・トスが行われる中央部で遊んでいる。大人たちの何人かは、分配用におかれたクジラの尾の部分と胸びれの部分を切り取って、自宅に持ち帰るためにビニール袋にすきなだけ入れている（写真11）。

ミキガックの給仕が終わると、デザートとして、エスキモー・ドーナッツ、ライスとレーズンの混ぜ物、果物の煮込み、コーヒー、紅茶を無くなるまで来客に振る舞う。この第2回目の祝宴は午後5時ごろまで続く。

午後5時になると第3回目の祝宴が始まる。まず、古老が感謝の辞を5分以上述べた後、食物を来客に給仕したり、配布したりする。この時に提供されるのは、冷凍肉などである。5センチ四方の冷凍肉をまず、各家族に3個ずつ配布し、その後、さら

に4個ずつ追加配布する。参加者は会場で肉を切り、食塩をかけて食べるが、残りは自宅への持ち帰り用にビニール袋に入れる。冷凍肉の提供が終わると、各捕鯨集団は、冷凍脂皮を一家族あたり3個程度配布する(写真12)。その後、2個以上の追加配布を行う。参加者は会場で食べきれない部分を持ち帰り用にビニール袋に入れる。冷凍脂皮がなくなると、尾びれの部分(アッキッカーク)を各家族に2、3片ずつ配布する。食物の配布が終わると、デザートとして、エスキモーアイスクリーム⁸⁾の塊1切れや、ケーキ1切れ、コーヒー、紅茶を来客に提供する。また、リンゴもしくはオレンジを各家族に3個ずつ配布する。来客は食事を楽しんだ後、午後7時ごろに第3回目の祝宴は閉幕となる。村人は分配された冷凍肉、冷凍マツタクなどをクーラーボックスや紙箱に入れて自宅に持ち帰る。

第3回目の祝宴が終わると各捕鯨集団は食事と休息を取りに自宅に一旦帰る。そして準備が整い次第、大人たちによるブランケット・トス遊びが行われる。この日は、午後9時30分ごろにブランケット・トス遊びが始まる(写真13)。捕鯨集団のメンバーがキャンディをふりまきながらブランケット・トス遊びを楽しむ。助走のための小さなジャンプを3回繰り返し、4回目に高く飛び上がる。その人が飛び続けることができる限り、続ける。これを2回ほど繰り返して、次の人に代わる。男性も女性もブランケット・トス遊びに参加するが、最初にブランケットの上にあがった人が、次にブランケット・トス遊びをするルールになっている。高く飛ぶには、ブランケットを持って、振りあげる人と飛びあがる人のタイミングが合わないといけない。飛びあがる人は入れ替わり、立ち替わって、午後11時15分ごろまで続く。ブランケット・トス遊びが終わると、捕鯨集団関係者と村人はドラム・ダンスが行われる会場へと移動する。

午後11時30分ごろから小学校の体育館でドラム・ダンスが行われる(写真14)。このドラム・ダンスは、彼らのための贈り物に自らなってくれたクジラのために行なわれる。観客である村人が、踊っている捕鯨キャプテンとその妻、彼らの捕鯨集団のメンバーに敬意を払う機会でもある。ドラムをたたき、歌う者の準備が整うと、最初に当日のナルカタックを主催した各捕鯨集団が集団ごとに2曲ずつダンスを披露する。1曲のダンスは2、3分で終わるが、それぞれの捕鯨集団が所有している独自のダンスである。捕鯨集団によってはダンサーの数が多く、各集団の勢力を誇示する絶好の機会でもある。また、老人の捕鯨キャプテンのダンスには味があり、威厳と迫力がある。5つの捕鯨集団が別々に、もしくは合同で踊ることもある。合間に子供たちのダンスが行われる。その後、本日のナルカタックを手伝った男性全員と女性全員が

別々に踊る。それから訪問者のみの自由参加の踊りも行なわれる。踊る側も見る側もドラム・ダンスを楽しむ。このドラム・ダンスは、午前1時30分ごろまで続いた。

以上のようにナルカタックは、祝宴（共食と鯨肉などの分配）とブランケット・トス遊び、ドラム・ダンスから構成されている⁹⁾。

4.4 ナルカタック祭の祝宴において提供された鯨肉などの重量について

ナルカタックの祝宴に提供されるクジラの部位はルールで定められている（岸上2012b）。ナルカタックの祝宴に提供される部位は、次の通りである（図3参照）。

(1) オーティ (*Uati*)：タヴシの部分から尾びれまでの間の部分は、捕鯨キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタックや感謝祭、クリスマスの時の祝宴に提供される。なお、この部分の半分がナルカタックに提供される。

(2) イティグルク (*Itigruk*)：オーティと2枚の尾ひれとの間の部分は、捕鯨キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタックの祝宴に提供される。

(3) アッキッカーク (*Aqikkaak*)：2枚の尾ひれは、捕鯨キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタックや感謝祭、クリスマスの時の祝宴に提供される。なお、この部分の半分がナルカタックに提供される。

(4) ウチク (*Utchik*)：舌の半分は解体作業に従事したすべての捕鯨集団に与えられ、舌の4分の1は捕鯨キャプテン宅での祝宴で、そして残りの4分の1はナルカタックの祝宴で村人に振舞われる。

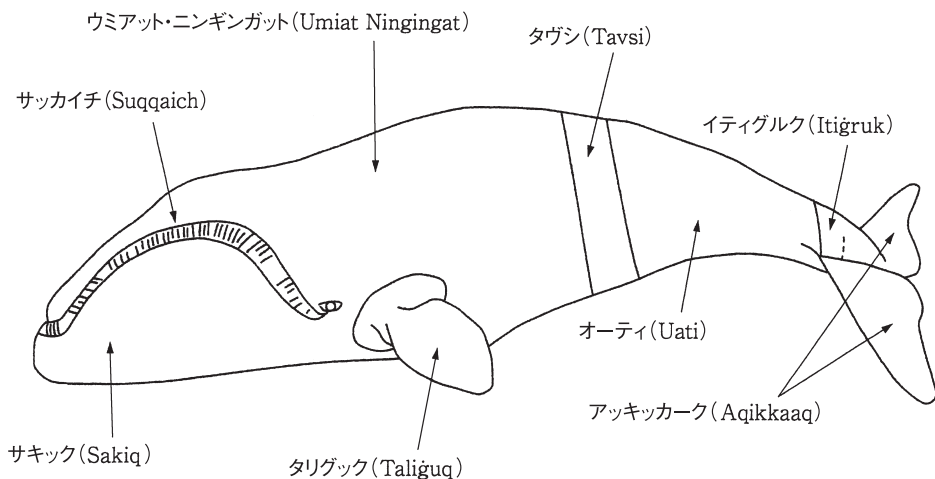


図3 ホッキョククジラの分配部位の名称 (North Slope Borough School District 2002)

(5) ウーマン (*Umman*, 心臓) やインガルアック (*Ingaluaq*, 小腸), タックトゥ (*Taqtu*, 腎臓): 半分は捕鯨キャプテン宅での祝宴で, 残りの半分は, 捕鯨キャプテンの地下貯蔵庫で保管され, ナルカタックの祝宴で振舞われる。

本節では, このナルカタックの祝宴に各捕鯨集団の捕鯨キャプテンがどれくらいの重量の鯨肉やその他の部位を提供したかを推定する。ここでは, すでに別稿 (岸上 2012b) で行ったように, ジョージらによる部位の計測値 (George, Philo, Caroll and Albert 1988) とブラワーらによる部位の大まかな分配比率 (Brower Jr. and Hepa 1998: 38) に基づいて推定する。

このナルカタックを主催した5つの捕鯨集団が捕獲したクジラの捕獲日, 性別, 体長は次の表2の通りである。5頭の平均体長は, 9.32メートルであった。

表2 クジラを捕獲した捕鯨キャプテン名, 捕獲日, クジラの性別, クジラの体長

| クジラの番号 | 捕鯨キャプテン (集団名) | 捕獲日 | 捕獲されたクジラの性別 | 捕獲されたクジラの体長 |
|--------|--------------------------------------|------------|-------------|-------------|
| 1 | Oliver Leavitt (Oliver Leavitt Crew) | 2012年4月22日 | メス | 10.08メートル |
| 2 | Jonathan Aiken (Aiken Crew) | 2012年4月22日 | オス | 9.88メートル |
| 3 | Jacob Adams (Anaġi Crew) | 2012年4月23日 | メス | 8.79メートル |
| 4 | George Adams (George Adams Crew) | 2012年4月28日 | オス | 8.31メートル |
| 5 | Charles Hopson (Hopson 1) | 2012年5月2日 | メス | 9.56メートル |

(情報提供: North Slope Borough の Department of Wildlife Management)

ジョージらの測定値を比例させると, 11メートルのクジラが14,797キログラムであるから, 9.32メートルのクジラは12,537.09キログラムとなる。これをもとに1頭当たりの各部位の重量をジョージらの測定値を比率換算させ, 計算したものが次の表3の通りである。

表3 9.32メートルのクジラの各部位の重量

| 部位 | パーセント | 重量 |
|-------|----------|--------------|
| 舌 | 6パーセント | 752.20キログラム |
| 脂皮・脂肪 | 44パーセント | 5014.84キログラム |
| 肉 | 16パーセント | 2005.90キログラム |
| 尾びれ | 1.5パーセント | 188.06キログラム |
| 腎臓 | 0.7パーセント | 87.76キログラム |
| 心臓 | 0.6パーセント | 75.22キログラム |
| 小腸 | 1.5パーセント | 188.06キログラム |

なお, ナルカタックに提供されるオーティの部位 (肉と脂皮) は全体の約30パーセントである。脂皮・脂肪の可食部は20パーセントである。これを基に計算すると,

岸上 米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて

ナルカタックに提供される鯨肉は 601.78 キログラム、脂皮は 330.98 キログラムとなる。舌は全体の 25 パーセントがナルカタックに提供されるので、188.05 キログラムとなる。尾びれは 50 パーセントがナルカタックに提供されるので 94.03 キログラム、腎臓と心臓、小腸はそれぞれ 50 パーセントずつがナルカタックに提供されるので 43.88 キログラム、37.61 キログラム、94.03 キログラムとなる。

このナルカタックに提供された全 5 頭の各部位の総重量は次の表 4 の通りとなる。なお、5 頭分の総重量は、6,951.8 キログラムである。

表 4 2012 年 6 月 29 日のナルカタックで消費・分配されたクジラの各部位の推定総重量

| 部位 | ナルカタックに提供された重量 |
|-------|----------------|
| 舌 | 940.25 キログラム |
| 脂皮・脂肪 | 1654.90 キログラム |
| 肉 | 3008.90 キログラム |
| 尾びれ | 470.15 キログラム |
| 腎臓 | 219.40 キログラム |
| 心臓 | 188.05 キログラム |
| 小腸 | 470.15 キログラム |

この推定計算から、この祭りだけで、鯨肉など約 7 トンが祝宴や分配に提供されていることが分かる。仮に 1,000 人の村人が参加したとすると、1 人当たり約 3 キログラムの肉と約 1.7 キログラムの脂皮などをもらうことができ、食べきれない部分は自宅に持ち帰ることになる。したがって、ナルカタックの祝宴には、共食という側面とともに、クジラの肉や脂皮などを村人に分配するという側面がある。

5 検討

次に、以上の記述に基づき、ナルカタックをアクターネットワーク論と機能の視点から検討する。

5.1 アクターネットワーク論によるナルカタックの検討

すでに別稿において、現在のイヌピアットの捕鯨がさまざまなアクターと絡み合いながら実施されていることを示した（岸上 2009; Kishigami 2010）。本稿ではナルカタックの開催についてアクターネットワーク論の視点から検討を加える。その際、アクターの数を必要最小限にとどめるため、これまでの調査に基づき（1）キリスト教

の神, (2) クジラ, (3) 自然環境, (4) 捕鯨, (5) 捕獲に成功した捕鯨集団, (6) 村人, (7) ナルカタックの7つのアクターを想定した。

(1) キリスト教の神は、現在のイヌピアットの信仰の対象であり、キリスト教の教えは彼らの行動に大きな影響を及ぼすアクターのひとつである。イヌピアットは、神がキリスト教の教えにそって正しく振舞う特定のイヌピアットの捕鯨者にクジラを遣わすと考えている。ここで神は、クジラを意のままに操り、イヌピアットにクジラを遣わしたり、遣わさなかったりするアクターである。また、神は万能であるため、自然環境をもつかさどるとイヌピアットは考えている。

(2) クジラは神の意志によって捕鯨者に遣わされると考えられている一方、アクターとしてのクジラは、正しい行ないをする捕鯨キャプテンとその妻に捕られるために、自らの命を差し出すと考えられている。後者の考え方は、イヌピアットの「伝統的な」世界観を反映している。クジラは人間の言葉を理解し、人間の言動を遠くから見ており、タブーを破った捕鯨者やクジラが嫌がることをする捕鯨者には近づかない存在だと考えられている。

(3) 自然環境とは、ここでは海流、海水の状況、風向きなどのことを指す。温暖化による影響などによってクジラの移動や捕鯨活動にさまざまな影響を与えるアクターである。2006年や2009年の春季のように、風向きと海水の状態が捕鯨に適しないような状況を生み出し、それぞれの年の春季捕鯨の成果は3頭と4頭というように不猟に終わった。一方、2005年や2010年、2012年の春には海水の状態が良く、それぞれ14頭以上のクジラを捕獲した(表1参照)。このように自然環境というアクターは捕鯨の成果を左右する。さらに、多数のクジラを水揚げした年にはナルカタックを盛大に開催することができるし、そうでない年には盛大に行なうことができない。すなわち、自然環境というアクターは、捕鯨というアクターを介してナルカタックの実施や規模に影響を与える。

(4) 捕鯨は、イヌピアットのハンターがクジラを捕獲する活動であるが、イヌピアットの考え方によれば、正しい考え方をもち、正しい行ないをする捕鯨キャプテンとその妻に、クジラが自らの命をささげる行為である。捕鯨が成功するかどうかは、イヌピアットの視点に立つと、捕鯨集団のメンバーたちの正しい言動、自然環境、神、クジラというアクターの相互作用の結果である。また、捕鯨が成功するか否かは、ナルカタックを開催するかどうかや、その規模を左右する。

(5) 捕獲に成功した捕鯨集団は、捕鯨キャプテン夫妻と乗組員である捕鯨者、その妻らから構成され、狩猟活動やナルカタックを実施する母体となる。クジラが嫌がる

言動をとらず、謙虚でかつ食物を他の人びとに分け与える捕鯨キャプテン夫妻や捕鯨者には、神の命によってクジラが捕られにやってくると考えられている。そうでない捕鯨集団は、クジラを捕獲できない。捕鯨集団は、捕鯨に従事し、捕鯨に成功した場合には、ナルカタックを主催するアクターとなる。捕鯨キャプテン夫妻や彼らの捕鯨集団のハンターは、できるだけ大量のクジラの肉やその他の可食部位を村人に提供することが彼らの義務であると同時に、喜びであると考えている。

(6) イヌピアットの村人はナルカタックに参加することによって、共食やブランケット・トス遊びやドラム・ダンスを楽しむとともに、鯨肉などをホスト（捕鯨集団）から受け取る。一方、彼らは神やクジラ、捕獲に成功した捕鯨集団に敬意を払うアクターでもある。また、彼らはクジラの豊穡を神やクジラに祈り、感謝するアクターでもある。さらに彼らは、ナルカタックを主催し、村人にクジラの肉などを提供した捕鯨キャプテン夫妻や彼らの捕鯨集団を社会的に評価するとともに、捕鯨キャプテンらに社会的名声や威信を付与するアクターである。

(7) ナルカタックは、祝宴での共食、ブランケット・トス遊び、ドラム・ダンスからなり、クジラの捕獲に成功した捕鯨集団が、鯨の成功を祝い、神やクジラ（の靈魂）を楽しませるために村人全員を招いて実施する捕鯨祭である。ナルカタックは春季にクジラが捕れた時にのみ実施される。少なくともキリスト教の神、クジラ、自然環境、捕鯨、捕獲に成功した捕鯨集団、村人というアクターが相互に、ある時には一方的に働き掛けながら、ナルカタックが実施されることになる（図4）。

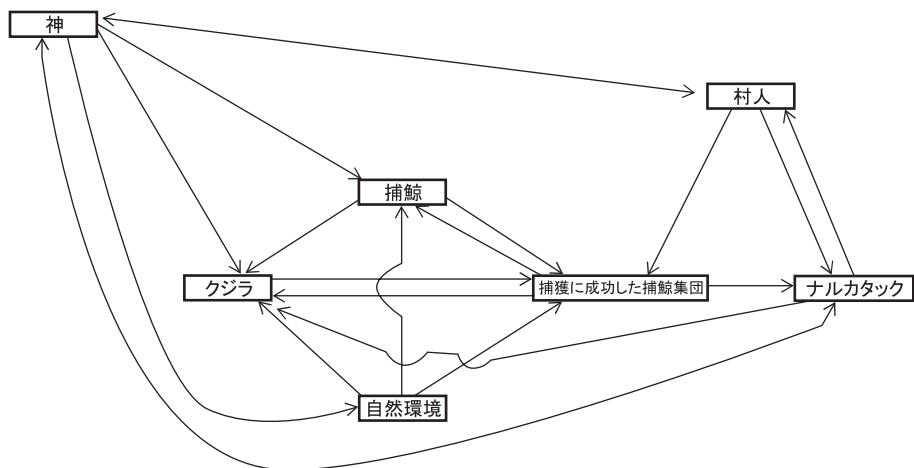


図4 ナルカタックをめぐるアクター間の相互作用
(→: おもな働きかけの方向を示す。なお、働きかけの強さは状況によって変化する)

神は自然環境を整え、正しい行ないをする捕鯨集団にクジラを遣わし、その集団は狩猟を通して（彼らに自らの命を差しだす）クジラを捕獲する。捕獲に成功した捕鯨集団は、ナルカタックを開催し、村人を招き、共食やブランケット・トス遊び、ドラム・ダンスの行ない、神やクジラ（の靈魂）を楽しませる。一方、村人は捕鯨集団や神、クジラに感謝や敬意を表す。このことに満足した神は再び、クジラを捕鯨集団に遣わすことになる。このことから分かるように各アクターがポジティブに影響しあい、循環のネットワークを形成する時には、神、クジラ、自然、捕鯨集団、村人（イヌピアット）の関係が相互に安定し、調和した状態を生み出していることが分かる。一方、アクターのひとつでも他のアクターにネガティブな働きかけをする場合には、このネットワークは異なる形状をとることになる。その結果、ナルカタックが開催されないことや開催されても規模が小さくなることがある。捕鯨集団によって特定の目的を持って実施されるナルカタックは、人間の能動性だけで実施できるものではなく、神やクジラや自然環境、捕鯨といったアクターとその働きかけ（エイジェンシー）の相互作用のもとで実現されているのである。このように考えると、ナルカタックは、捕鯨の成功を継続させるネットワークの結節点となるアクターとして、村人やクジラ、神、捕鯨集団に影響を及ぼすアクターであることが分かる。大猟に基づく大規模なナルカタックは大量の食物を村人に提供する機会であるが、その開催の有無や規模は、本稿で指摘した7つのアクターの相互作用によって左右される点を強調しておきたい。

5.2 ナルカタックの機能分析

これまでアクターネットワーク論に依拠しながら、ナルカタックが他のアクターとどのように相互作用しながら実施されるのかを見てきた。次に、現地のイヌピアットにとってナルカタックが現在の政治・経済・社会的な脈絡の中でどのような社会的効果や社会的意味があるかについて機能分析を行ないたい。

ナルカタックとは、その年の春季捕鯨においてクジラを捕獲した捕鯨キャプテンが主催する捕鯨祭であり、祝宴、ブランケット・トス遊び、ドラム・ダンスからなる。ナルカタックは、捕鯨の成功を祝い、クジラを遣わした神と獲られてくれたクジラに感謝を表す祭りである。祝宴の準備は、各捕鯨集団を単位として捕鯨キャプテン夫妻の指示のもとに実施されるが、複数の捕鯨集団が合同でナルカタックを開催する場合には、捕鯨キャプテンの間で話し合いや調整が行われる。図1で示したように、複数の捕鯨集団が合同でナルカタックを実施する場合は、それぞれの捕鯨キャプテン、も

しくはその妻が拡大家族関係であることが多い。

祝宴では、捕鯨キャプテン夫妻と彼らの捕鯨集団が捕獲したクジラの特定の部位を来客に振る舞う。現在のイヌピアットにとって鯨肉や脂皮などは希少で、文化的に価値の高い食物である¹⁰⁾。村人からみれば、家族に捕鯨者がいなければ入手できない鯨肉やその他の部位を食べることができ、余剰があれば自宅に持ち帰ることができる機会でもある。すでに示したように、1回のナルカタックで大量の鯨肉や脂皮などが村全体に提供されることになる。村人は共食を楽しむとともに、鯨肉や脂皮などの食物を入手することができる。すなわち、祝宴を通して鯨肉などが捕鯨キャプテンから村人へと分配され、流通していく。村人はナルカタックの主催者たちに感謝し、敬意を払う一方、捕鯨キャプテン夫妻や彼らの集団のメンバーは村人に食物を提供したという満足感（与えることの喜び）を満たすとともに、彼らの社会的威信を高めたり、確認したりする場となる。

ブランケット・トスは楽しみのために実施されるが、最初に飛ぶのは必ずナルカタックを主催した捕鯨集団のメンバーであり、捕鯨に成功した者が自らの身体によってその喜びを表出する場であり、村人は観客として捕鯨に成功した者を見る場でもある。捕鯨関係者が一通り飛んだあとは、誰でもブランケット・トスを楽しむことができる。

ドラム・ダンスのパフォーマンスは、捕鯨集団ごとに観客（村人）の前で行なわれる。このダンス会も見ると参加する側も楽しむことを目的としている。しかし、この捕鯨集団によるドラム・ダンスには捕鯨キャプテンやメンバーの家族も参加するため、捕鯨集団のみならず、捕鯨キャプテン夫妻の一族（拡大家族）の成功や勢力を公にする政治的な意味合いもある。各集団独自のダンスを通して、各集団のアイデンティティを確認するとともに表明する場となっている。

以上のようにナルカタックは、捕鯨の成功を祝う祭りであるが、食物の分配・流通の場となり、村人全員が喜びを分かち合い、捕鯨社会の一員であることを確認する場となっている。さらにその実施の過程で各捕鯨集団のメンバーやその家族の喜びや、社会的威信、アイデンティティを表出し、確認する場となっている。

6 結語

ナルカタックとは、春季のクジラ猟に成功した捕鯨集団が主催する捕鯨祭で、祝宴における共食、ブランケット・トス遊び、ドラム・ダンスからなる。この祭にはすべ

での村人が招かれる。ナルカタックの本来の目的は、クジラ（の靈魂）を楽しませることであったようだが、現在では村をあげてクジラの捕獲を祝う祝祭のような雰囲気醸し出している。

本稿では、現在のナルカタックについて、その実施の状況を報告するとともに、アクターネットワーク論と機能分析に基づく検討を試み、イヌピアット社会における捕鯨祭の特徴を明らかにした。その結果、ナルカタックは捕鯨集団が特定の目的を持って実施しているが、人間（イヌピアット）の能動性によってのみで実施可能なものではなく、神やクジラや自然環境、捕鯨といったアクターとの相互作用のもとで実現するものであると筆者は指摘したい。さらに、ナルカタックにおける共食や鯨肉の分配には文化的に価値の高い食物を村人に提供し、村全体の文化的ウェルビーイングに貢献するとともに、捕鯨集団の社会的評価を確認し、社会的威信を付与する場となっていると主張する。

ナルカタックという実践を理解する方法は複数あるが、本稿はアクターネットワーク論と機能分析を組み合わせることによってイヌピアット社会におけるナルカタックを検討し、その特徴を明らかにした試論である。ナルカタックをさらに深く理解するためには、従来とは異なる視点や分析方法でナルカタックを検討し、理解する必要があるかもしれない。今後の課題としたい。

謝 辞

本稿は、平成24年度科学研究費補助金基盤研究(B)「北アメリカ先住民社会における先住民生存捕鯨と先住権」(代表者：岸上伸啓、課題番号：21401045)の研究成果の一部である。本研究のための現地調査を実施するにあたり、BASC (Barrow Arctic Science Consortium) の Glenn Sheehan 博士、The Barrow Whaling Captains' Association の Eugene Brower さん、Harry Brower Jr. さん、Herman Ahsoak さん、Johnny Leavitt さん、ノース・スロープ郡野生生物管理局の Craig George さんらをはじめとする多数の方々から多大のご協力を得た。また、国立民族学博物館外来研究員の中村真里絵さんから草稿に対してコメントを頂戴し、改稿の参考にさせて頂いた。これらの方々に、記して感謝の意を表すものである。誤りがあるとすれば、すべて筆者の責任である。

注

- 1) 280頭のうち25頭(1年あたり5頭)はロシアの先住民に捕獲を移譲しているので、アラスカ先住民は255頭(1年あたり51頭)まで捕獲してもよい。2012年7月のパナマシティで開催された第64回IWC総会において、2013年から捕獲制限枠の有効期間が5年から6

- 年に延長されることになった。
- 2) バロー村においては、ケンブリッジ大学のバーバラ・ボードンホーン (Barbara Bodenhorn) 博士がイヌピアットの社会組織に関する調査を精力的に実施し、その成果を世に問うているが、鯨肉などの分配や流通については定量的な研究を行っていない (Bodenhorn 1990, 2000, 2003, 2005 ほか)。また、ナルカタックに関する調査もポイント・ホープ村の事例紹介 (Larson 2003; Rainey 1947; VanStone 1962 など) を除けば、筆者の知る限り、ほとんどおこなわれていない。その例外は、気候変動と春季捕鯨、ナルカタックでのドラム・ダンス用の曲制作の関係を論じた榊原千絵の研究である (Sakakibara 2009)。
 - 3) アラスカ州バロー村での現地調査は、次の 12 回である。第 1 次調査は 2006.9.17 ~ 9.29, 第 2 次調査は 2007.7.24 ~ 8.13, 第 3 次調査は 2008.2.25 ~ 3.11, 第 4 次調査は 2008.9.7 ~ 10.5, 第 5 次調査は 2009.6.7 ~ 6.19, 第 6 次調査は 2010.2.24 ~ 3.12, 第 7 次調査は 2010.4.29 ~ 5.9, 第 8 次調査は 2010.8.17 ~ 9.3, 第 9 次調査は 2011.1.12 ~ 1.24, 第 10 次調査は 2011.6.15 ~ 6.28, 第 11 次調査は 2011.11.19 ~ 11.27, 第 12 次調査は 2011.6.25 ~ 7.4 に実施された。
 - 4) アメリカにおいて実践理論 (theory of practice) を主唱するシェリー・オートナー (Shery Ortner) は、主体性 (subjectivity) やエイジェンシー (agency) について次のように述べている。「主体性とは、行為主体を突き動かす知覚や愛情、思考、欲望、恐怖の諸様態の全体的効果である。また、それはそれらの愛情や思考などの諸様態を形づくり、組織し、そして引き起こす文化的・社会的様式のことも常に意味する」(Ortner 2006: 107)。オートナーは主体性をエイジェンシーの基盤であると考えている (Ortner 2006: 110)。さらに彼女は、エイジェンシーには 2 つの意味があると述べている。「ある分野では [エイジェンシー] とは、意図性と (文化的に規定された) プロジェクトの追求を意味する。別の分野ではそれは、パワー、すなわち社会的な不平等や非対称な力の諸関係内で行動することを意味する」(Ortner 2006: 139)。
 - 5) 村と海水原縁部の捕鯨のためのキャンプ地との距離は、10 キロメートルから 20 キロメートルである。ハンターらは仕事やシャワー、洗濯、必要な物資や道具を入手するために、村とキャンプ地との間をスノーモービルで頻繁に行き来している。携帯電話を利用してピザを注文し、キャンプ地の近くまで配達してもらうこともある。
 - 6) ポイント・ホープ村などでは、バロー村と異なり 12 メートル以上の大きなクジラを意図的に捕獲する傾向がある。これは大きなクジラを捕獲すれば、より大量の肉を村人にもたすことができるからである。アラスカ地域全体では捕獲したクジラの平均体長は約 11 メートルである (岸上 2012b: 164)。一方、バロー村では捕獲や解体が容易で、味の良い約 9 メートルの若いクジラを捕獲する傾向にある。
 - 7) 村によってナルカタックの規模や期間、やり方が異なる。ポイント・ホープでは 3 日間の捕鯨祭が実施され、ナルカタックは 3 日目に実施されている (Larson 2003)。
 - 8) 筆者がもらって食べたのは、大きさが 4 センチメートル × 7 センチメートル × 2 センチメートルほどの大きさの塊で、カリブーの脂肪をこねて固まらせたものであった。甘みはほとんどなく味は脂肪そのものであった。
 - 9) ナルカタックの開催前に村内で死者が出た場合は、ナルカタックは中止され、クジラの肉や脂が村人に分配される。また、クジラが 1 頭も取れない時には、ナルカタックは開催されない。
 - 10) ここで「希少な」という表現を用いたのは、2 つの理由による。第 1 に、国際捕鯨委員会 (IWC) の設定する捕獲制限枠 (クオータ) のもとで捕鯨が行われており、イヌピアット人口が約 2,700 名のバロー村の場合、他の村の捕獲制限枠を譲ってもらわない限りは、年間 22 頭のクジラの捕獲しか認められていないからである。第 2 に、春季捕鯨の成功は天候や海水の状態によって大きく作用されるからである。

引用・参考文献

Bockstoce, John et al.

2005 The Geographic Distribution of Bowhead Whales, *Balaena mysticetus*, in the Bering, Chukchi, and Beaufort Seas: Evidence from Whaling Records, 1849–1914. *Marine Fisheries*

- Review* 67(3):1-43.
- Bodenhorn, Barbara
 1990 I'm Not the Great Hunter; My Wife Is: Inupiat and Anthropological Models of Gender. *Études/Inuit/Studies* 14(1-2): 55-74.
 2000 It's Good to Know Who Your Relatives Are but We Were Taught to Share with Everybody. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No. 53), pp. 27-60. Osaka: National Museum of Ethnology.
 2003 Fall Whaling in Barrow, Alaska: A Consideration of Strategic Decision-Making. In Allen P. McCartney (ed.) *Indigenous Ways to the Present: Native Whaling in the Western Arctic*, pp. 277-306. Edmonton: CCI Press.
 2005 Sharing Costs: An Exploration of Personal and Individual Property, Equalities and Differentiation. In Thomas Widlok and Wolde Gossa Tadesse (eds.) *Property and Equality* Vo. 1 (Ritualisation, Sharing, Egalitarianism), pp. 77-104. New York and Oxford: Berghahn Books.
- Brower, Harry, Jr. and Taqulik Hepa
 1998 Subsistence Hunting Activities and the Inupiat Eskimo. *Cultural Survival Quarterly* 22(3): 37-39.
- Burch, Ernest S., Jr.
 1994 The Inupiat and the Christianization of Arctic Alaska. *Études/Inuit/Studies* 18(1-2): 81-108.
- バトラー, ジュディス
 1999 『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳, 東京: 青土社。
- Chance, Norman A.
 1990 *The Inupiat and Arctic Alaska: An Ethnography of Development*. Fort Worth: Holt, Rinehart and Winston.
- Gell, Alfred
 1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- George, John Craig, Michael L. Philo, Geoffrey M. Carroll, and Thomas F. Albert.
 1988 1987 Subsistence Harvest of Bowhead Whales, *Balaena mysticetus*, by Alaskan Eskimo (SC/39/PS12), *Report of the International Whaling Commission* 38: 389-392.
- 浜口 尚
 2012 「先住民生存捕鯨再考」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 45-63, 東京: 成山堂出版。
- 笠松不二男
 2000 『クジラの生態』東京: 恒星社厚生閣。
- 春日直樹
 2011 「序章 人類学の静かな革命—いわゆる存在論的転換」春日直樹編『現実批判の人類学 新世代のエスノグラフィへ』pp. 9-31, 京都: 世界思想社。
- 岸上伸啓
 2009 「文化の安全保障の視点から見た先住民生存捕鯨に関する予備的考察—アメリカ合衆国アラスカ北西地域の事例から」『国立民族学博物館研究報告』33(4): 493-550。
 2011 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの祝宴アプガウティについて」『人文論究』80: 97-110。
 2012a 「北極海の狩人たち—クジラとイヌピアットの人々」札幌: 風土デザイン研究所。
 2012b 「米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について」『国立民族学博物館研究報告』36(2): 147-179。
 2012c 「アメリカ・アラスカにおける先住民生存捕鯨について」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 64-82, 東京: 成山堂書店。
- Kishigami, Nobuhiro
 2010 Climate Change, Oil and Gas Development, and Inupiat Whaling in Northwest Alaska. *Études/Inuit/Studies* 34(1): 91-107.
- 久保明教
 2011 「世界を制作=認識する—ブルーノ・ラトゥール × アルフレッド・ジェル」春日直

岸上 米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて

樹編『現実批判の人類学 新世代のエスノグラフィへ』 pp. 34-53, 京都：世界思想社。

Larson, Mary A.

2003 Festival and Tradition: The Whaling Festival at Point Hope. In Allen P. McCartney (ed.) *Indigenous Ways to the Present: Native Whaling in the Western Arctic* (Studies in Whaling No. 6), pp. 341-355. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute (CCI) Press.

Latour, Bruno

2005 *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. Oxford: Oxford University Press.

North Slope Borough School District

2002 Whale Distribution in Barrow, Wainwright, Kaktovik and Nuiqsut. *Aḡviqsiugnikun, Whaling Standards, Barrow and Wainwright*. Barrow, Alaska: North Slope Borough School District.

Ortner, Sherry B.

2006 *Anthropology and Social Theory: Culture, Power, and the Acting Subject*. Durham and London: Duke University Press.

Rainey, Froelich

1947 The Whale Hunters of Tigara. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 41(2): 231-283.

Sakakibara, Chie

2009 'No Whale, No Music': Iñupiaq Drumming and Global Warming. *Polar Record* 45(235): 289-303.

Savelle, James M.

2005 The Development of Indigenous Whaling: Prehistoric and Historic Contexts. In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No. 67), pp. 53-58. Osaka: National Museum of Ethnology.

Sheehan, Glenn

1997 *In the Belly of the Whale: Trade and War in Eskimo Society*. Anchorage: Alaska Anthropological Association.

田中雅一

2006 「序論 ミクロ人類学の課題」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践 エイジェンシー / ネットワーク / 身体』 pp. 1-37, 京都：世界思想社。

VanStone, James

1962 *Point Hope: An Eskimo Village in Transition*. Seattle: University of Washington Press.